

【暗証聖句】「それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。」ヘブライ人への手紙 4:9

【今週のポイント】

【日・安息の場所としての約束の地】

神様はアブラハムに、未来について預言しました。それは耳を疑うような預言でした。まだ子どもが生まれてもいない先に、また子孫は祝福され大いなる国民となるとの約束であったはずなのに、主はアブラムに、「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう」（創世記 15:13,14）と言われたのです。これはエジプトで400年もの間、奴隷となることを意味していました。しかし、エジプトでアブラハムの子孫は大きく増えることになるのです。不自由な状況ではありましたが、エジプトにいたからこそ他国との争いに巻き込まれずにすみ、国家を形成できるまでに大きくなっていくことができたのです。

エジプトを脱出した後、約束の地カナンを目指しました。これは単に土地が与えられるということだけでなく、イスラエルの民を神のもとに連れ帰り、カナンの地で神様と近い関係を楽しみ、神様の安息に入ることができるようにするためでした。この神様の安息に入るために、特に安息日を大切な日として与えてくださいました。安息日には、創造の記念日としての安息日（出エジプト 20:8~11）と、奴隷から解放された贖いの記念日としての安息日（申命記 5:12~15）の2つの意味がありました。

イスラエルのこれらの経験は、私達に対するモデルともなっています。すなわち私達も同様に、神様の安息に入るために安息日が与えられています。その日、私達は自分たちが神様から創造された者であることを確認し、罪の奴隷から贖われ、救われたことを喜ぶのです。

【月・不信のために】

ヘブライ 3:17~19 に、「いったいだれに対して、神は四十年間憤られたのか…いったいだれに対して、御自分の安息にあずからせはしないと、誓われたのか。従わなかった者に対してではなかったか。このようにして、彼らが安息にあずかることができなかつたのは、不信仰のせいであつたことがわたしたちに分かるのです」と書かれてあります。エジプトを脱出したあと、本当であればすぐにカナンの地に入ることができたのに、カナンの地に住んでいる民は自分たちよりも強く、とても入って行くことはできないと不信仰に陥りました。カナン人よりも遥かに強いエジプトから数々の奇跡を通してここまでやって来たのにです。神様は10の災いをエジプト人に下し、雲と火の柱で導き、紅海も水を真二つにしてエジプト軍を全滅させ、さらに荒野では天からマナを降らせ、岩から水を噴出させて民を養ったにもかかわらず、同じように主なる神が力強く働いてカナンを攻略できるとの信仰を持つことができなかつたのです。ヨシヤとカレブの2人だけは「大丈夫です。行きましょう」と信仰を現わしましたが、多数の声にかき消されてしまいました。

私達も天のカナンが約束されていますが、不信仰に陥ることのないように注意しなければなりません。自分の行いに目を向ければ、とても天国に入れる気がしないことでしょう。しかし、天のカナンの地に入れて下さるのは主なる神様なのです。イエス様が私達の代わりに戦って下さり、勝利して下さるのです。この点を絶対に見失ってはなりません。

イスラエルの民は40年荒野をさまようこととなりますが、この40年は試練であり、また信仰の訓練期間でもありました。次の世代の者たちがカナンに入っていくこととなりますが、荒野での40年の経験が必要だったのです。

【火・今日、あなたたちが神の声を聞くならば】

ヘブライ 4:9 に「それで、安息日の休みが神の民に残されているのです」と書かれてあります。荒野世代は不信仰のゆえに安息に与ることはできませんでした。神様への不信仰は心の平安を失わせます。しかし、神の安息がすべて取り上げられてしまったわけではないのです。その後の世代にまだ残されたのです。ここに神の愛と憐みがあります。だから、ダビデは、「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない」（ヘブライ 4:3）と、安息に与るように勧めているのです。そもそも安息日は、出エジプトの後に制定されたのではなく、「天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです」

(ヘブライ 4:3)。そう考えると、荒野世代が失敗したからといって、後世の人々も安息に与れないわけではないことがわかります。ところで、この「残されている」というギリシャ語には、(安息日が) 放置されている、無視されているという意味があります。神様の目にはせつかくの安息が、神様との交わりの時が、無視されているように見えたのです。私達は、この神の安息が残されていることを知ったなら、明日に延ばすことなく「今日」、信仰により、この神の安息に与るように努めることが大切です。

【水・神の安息に入る】

ヘブル 4:2, 3「というのは、わたしたちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。信じたわたしたちは、この安息にあずかることができるのです」

神様の安息に預かることができる、これは私たちにとって本当に素晴らしい良き知らせ、福音なのだと言います。ところが、出エジプトをした後のイスラエルの民たちは、この福音のメッセージが何の役にも立たなかったと言うのです。安息の地であるカナンに入ることが約束されていたのに、まさにこれこそ希望に満ちた福音だったのに、この神様の約束が彼らの上に実現しなかったのです。なぜかと言うと、この素晴らしい神様の約束が、信仰によって結びつかなかったからです。信仰がなければ、どれほど素晴らしい神様の約束も、絵に描いたもちであり、自分のものとはならないのです。信仰が神様の安息にあずかるための大きな鍵なのです。

しかしここで、「信じたわたしたちは、この安息にあずかることができるのです」と、はっきり書かれてあります。日々の生活における安息はもちろん、最終的な安息である天国に入ることも同様に、神様を単純に信じることによって、あずかることができるのです。

【木・新たな創造を先取りする】

創世記 20 章の安息日の教えと申命記 5 章の安息日の教えの違いは、すでに学んだように創世記 20 章は創造の業の記念として聖別するようにと教えられていますが、申命記 5 章で奴隷からの解放の記念が加えられていることです。しかし、どちらも過去の出来事に目を向けさせています。一方、ヘブライ人への手紙での安息日も教えは、未来にも目を向けさせ、神様が将来の安息を準備されているという新たな次元での安息について語っています。贖いの業の頂点は、未来における新しい創造において完成を見ます。そう考えると、安息日ごとに私達は、未来に待っている天国での安息をも先取りして、喜ぶことができるのです。イエス様は「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」(ルカ 10:20) と言われましたが、安息日を聖別するとき、わたしたちの名が天に書き記されていることを意識したいと思います。